令和4年度

東国文化自由研究

通学路にあった謎の高い壁

― 三ツ寺Ⅰ遺跡から北谷遺跡へ ―

高崎市立群馬中央中学校

1年2組26番　中島　美釉

1　はじめに・・・レポート作成のきっかけ・・・

国府小学校への通学路に高さ2mくらいの壁があります。自分の身長よりもずっと高いため、そばを歩くと壁が落ちてくるように感じ、離れて歩くと今度は車が怖いという、そんな場所でした。高学年になって家族と自転車で出かけたとき、ここは「北谷遺跡という遺跡だよ」と父に教えられました。上がってみると何だか広い公園のようでした。でも、遺跡の看板以外は何もありませんでした。

小学6年生の社会の授業で、群馬県では、5世紀のころ、有力な豪族が大きな古墳を造ったことを学習しました。最初は、群馬の古墳について調べようと思いましたが、北谷遺跡を探れば、主人公の豪族のことがもっと分かるかもしれないと思い、このレポートを作成することにしました。

2　調査の方法・・・そして気づいたこと・・・

・いろいろな文献やインターネットを利用して調べる。
・博物館や発掘調査をした財団の職員の方と連絡を取り、質問する。
・自分で遺跡や博物館を訪れて歴史を肌で感じ、想像力をはたらかせる。

簡単にまとめられるかなと思っていたところ、北谷遺跡に関する資料がとても少ないことが分かりました。北谷遺跡をインターネットで調べるとあまり出てきませんし、発掘調査の記録をかみつけの里博物館で読んでみましたが、かなり専門的で私がすぐに理解できるものではなさそうでした。一方で、同じような遺跡である三ツ寺Ⅰ遺跡は、高校の教科書に掲載されるくらい有名で、資料もたくさんありました。

かみつけの里博物館や群馬県埋蔵文化財調査事業団などに問い合わせてみたところ、北谷遺跡は遺跡の姿（全体像）を調べる発掘が行われ、国指定遺跡として承認されたが、本格的な発掘調査はなされていないということが分かりました。事業団の方からは、三ツ寺Ⅰ遺跡についてまとめ、それから北谷遺跡と較べてみるのがいいのではないかという助言をもらったので、そのやりかたでレポート作成することにしました。また、高崎市の文化財保護課の方にも相談したところ、北谷遺跡について書かれた文献や新聞記事のコピーを送ってもらいました。

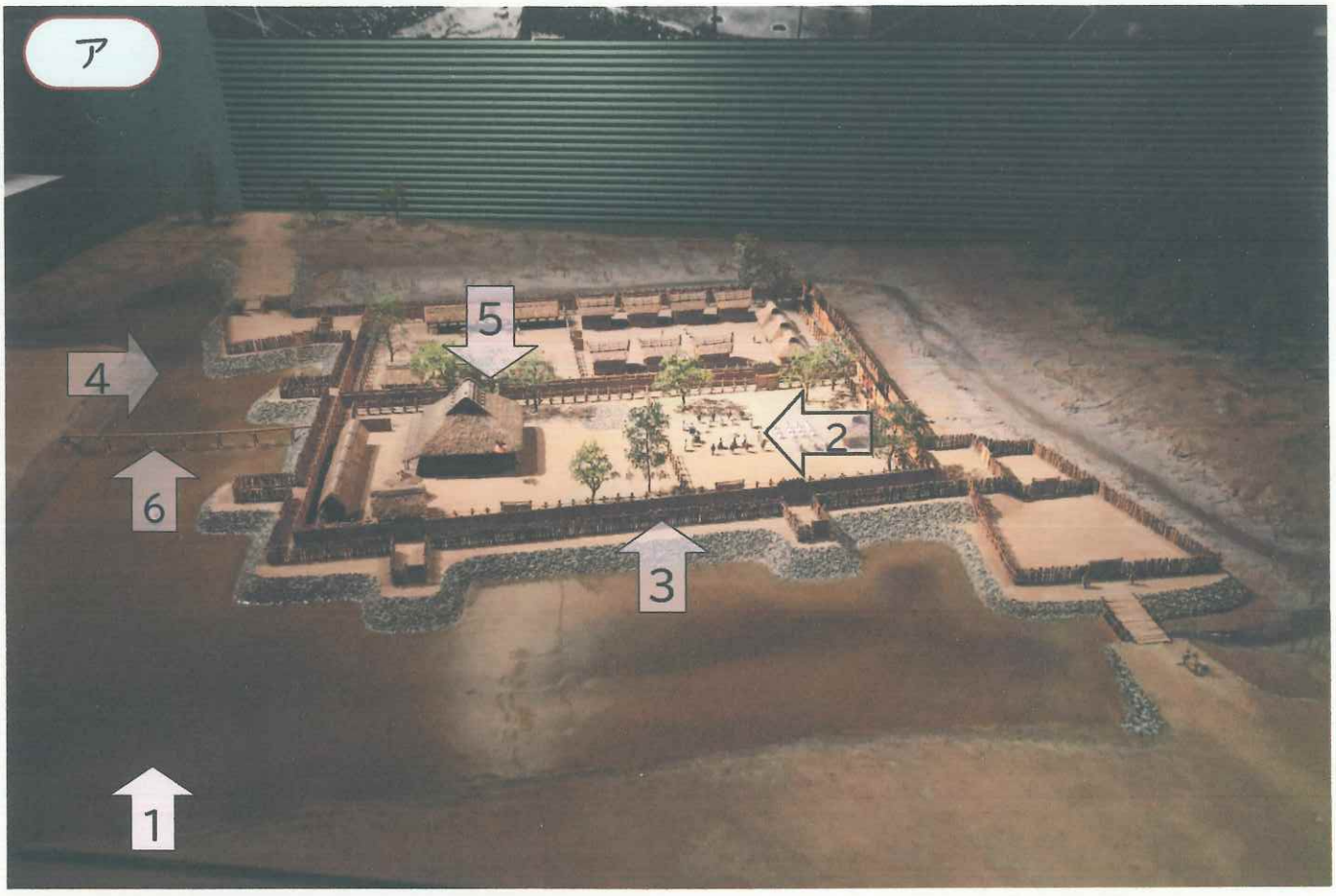
3　三ツ寺Ⅰ遺跡とは・・・豪族の居館・・・

この遺跡は、豪族（在地の首長）の居館です。居館（きょかん）とは、豪族の生活の場であり、儀式や祭りをおこなう場所です。この遺跡の発掘調査は1981（昭和56）年に始まりました。上野と新潟を結ぶ上越新幹線の建設が行われた時の調査で、居館と思われる跡が出土しました。居館は一辺が86mの四角形をした区画で、外側に何カ所か見張り場とされる張り出しがありまし

た。その北と西には猿府川(さるふかわ)の流れを取り込んだ幅30～40m、深さ3～4mほどの濠(ほり)がありました。濠の斜面には、川原石が何段にも3mの高さにびっしりはり付けられていました。

居館の敷地は三重の柵(さく)で囲まれ、真ん中には二重の柵があって南北二つに分けられていました。このうち南側の区画からは、14m×12mの大きさの建物跡が見つかり、濠のそとから樋を使って水をひきこみ、水の祭りをおこなっていた石敷きの施設の跡も発見されました。

4　復元模型をのぞいてみよう･･･かみつけの里博物館を訪ねて･･･



（かみつけの里博物館にて撮影）

図版アは、三ツ寺Ⅰ遺跡の復元模型です。【↑1】川の流れを利用した濠ですが、深さが3mもあり、25mプールが何個入るのだろうと考え込んでしまうくらい深くて広いなという感じです。【↑2】居館の敷地もかなり広そうです。家を建てるときに“坪”という単位で面積を表すと家族から聞きました。私の家の面積がおおよそ90坪、約300㎡となります。居館はだいたい7400㎡(86m×86m)なので、我が家25個ぶんとなります。もし住むとなったら庭の手入れが大変だと家族が話していました。平安時代の貴族は寝殿造の家に住み、庭の池に船を浮かべたり歌を詠んだりしていたようですが、大きさや広さ、造るときの大変さでは、豪族の居館も負けていないと思いました。

【↑3】中学校の歴史教科書では、弥生時代はむらとむらが、国と国が争う時代であると書

いてあります。佐賀県の吉野ヶ里遺跡をみると、戦いに備えて、むらを濠や柵で何重にも取り囲んでいたことが分かります。古墳時代に入っても、稲作に大切な水を巡って争いがあったと考えられるので、三ツ寺の豪族は自分の家をがっちり守ろうとしていたのかなと思いました。

【↑4】私は、保渡田古墳群の八幡塚古墳に数回登ったことがありすが、墳丘の斜面には“葺石”とよばれる石がきれいに並べらていました。図版【イ】は、三ツ寺Ⅰ遺跡発見当時の濠とその斜面ですが、“葺石”みたいです。研究者の方は古墳造りのノウハウが随所に発揮されていると指摘しています。三ツ寺Ⅰ遺跡の周りで発掘されたむらの様子と較べると、明らかに違う場所です。家を建てるときも古墳を造るときも、“俺は権力者(豪族)だぞ”と強烈に主張をしているかのようです。

【↑5】豪族が生活していた建物は、むら人たちの平地建物や竪穴住居よりもずっと立派な造りだったようです。埴輪といえば、私は、群馬図書館の入り口にいる盾持ち人埴輪を思い出しますが、三ツ寺Ⅰ遺跡近くの遺跡では、図版【ウ】のような家形の埴輪(寄棟の家)が出土しています。豪族の建物もこんな形だったのでしょうか。

【↑6】復元図の中で気になるのは、外から樋(とい)を使って水をひきこみ、水にまつわる祭事をおこなっていたことです。群馬県の豪族の居館跡は、他にも伊勢崎の原之城(げんのじょう)遺跡などがありますが、その多くは扇状地の地形を利用した水を確保しやすい場所に立地しているようです。そこでは、米の豊作を願い、むらの人々の生活を守るために水の神を祭ったのです。豪族は水利を支配した有力者だったことがよく分かります。

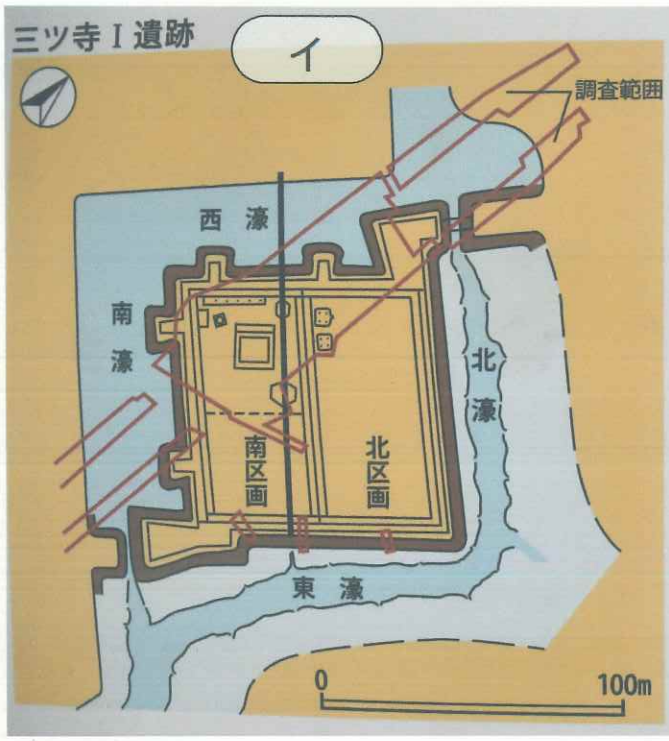
博物館では遺跡のあった地域全体の様子もわかり、遺跡のことだけでなく、日本全体や東アジアの歴史をしっかり見ることが重要だと知りました。また、「榛名山古代遺跡タイムトラベル」をつかって、豪族や従者の建物や祭祀場の様子をバーチャル体験しました。北谷遺跡も同じような様子だったのかと感じ、大変参考になりました。

5　北谷遺跡を訪ねてみた・・・同時代の居館跡・・・

北谷遺跡は三ツ寺Ⅰ遺跡と同時代の居館跡で、高崎・渋川線バイパスの冷水交差点の近くにあります。右の図版は、手前に冷水交差点の方向、奥に国府小学校の方向となります。小学生の時はこの壁がとても高く感じました。今でも道路からは、遺跡の上を見ることが出来ません。この上に、三ツ寺Ⅰ遺跡と同じような建物や祭りを行う場所があった考えられています。

※写真①～⑥は、図版イの①～⑥と同じ場所です。

図版イは、2つの遺跡の平面図です。比べると造りはよく似ていて、一辺が約90mの方形と、規模も同じくらいです。そのため、基本となる設計図があったと考えられています。前方後円墳もヤマト政権が認めた設計図に基づいて造られていたので、豪族の居館も同じだったのかもしれません。



遺跡に上がってみると、予想以上に広いと感じました。三ツ寺Ⅰ遺跡では、埋め戻されているためか、ここに居館があったのだねといったくらいの印象しかありませんでした。歩き回りながらパノラマ写真（下の写真）も撮ってみました。

南側の谷に続く東側の濠の様子です。くぼ地になっているのがよくわかります。左側の木が生えている堤防のようなところが、館内部から続く④の土橋です。

⑤のあたりから④方向を見ると、土橋の様子がよくわかります。道路側からはわからない北谷遺跡の迫力が伝わってきました。

“お～っ、すごいね。こんなの造ったんだ”と豪族の権力の大きさ、強さを感じました。

⑤は居館北側の張り出し部の間のような所です。2段の急坂を下りて、父に北側の濠に立ってもらいました。手を挙げている父の指先の高さは、2mを越えています。左側に段がありますが、さらにもう一段上があり、②で私が立っていたところです。濠の深さを実感しました。④に続いて、“お～っ”という声が出ました。

北谷遺跡は染谷川の河岸段丘を利用して造られました。⑥から染谷川をみています。

そして、⑥から少し見上げるように遺跡の方向を見ると、北谷遺跡の南西の角、①の壁の一部が見えます。

かみつけの里博物館に収蔵されている北谷遺跡の出土品です。三ツ寺Ⅰ遺跡に比べると出土品の量がかなり少ないそうです。

北谷の居館は、6世紀初めの榛名山の噴火により、造られて間もなく放棄されたためと考えられています。このような規模の大きな居館を短期間のうちに出て行かなくてはならなかったのは、とても残念だったろうなと思いました。ところで、ここに住もうとしてた豪族はその後どこに行ったのでしょうか。

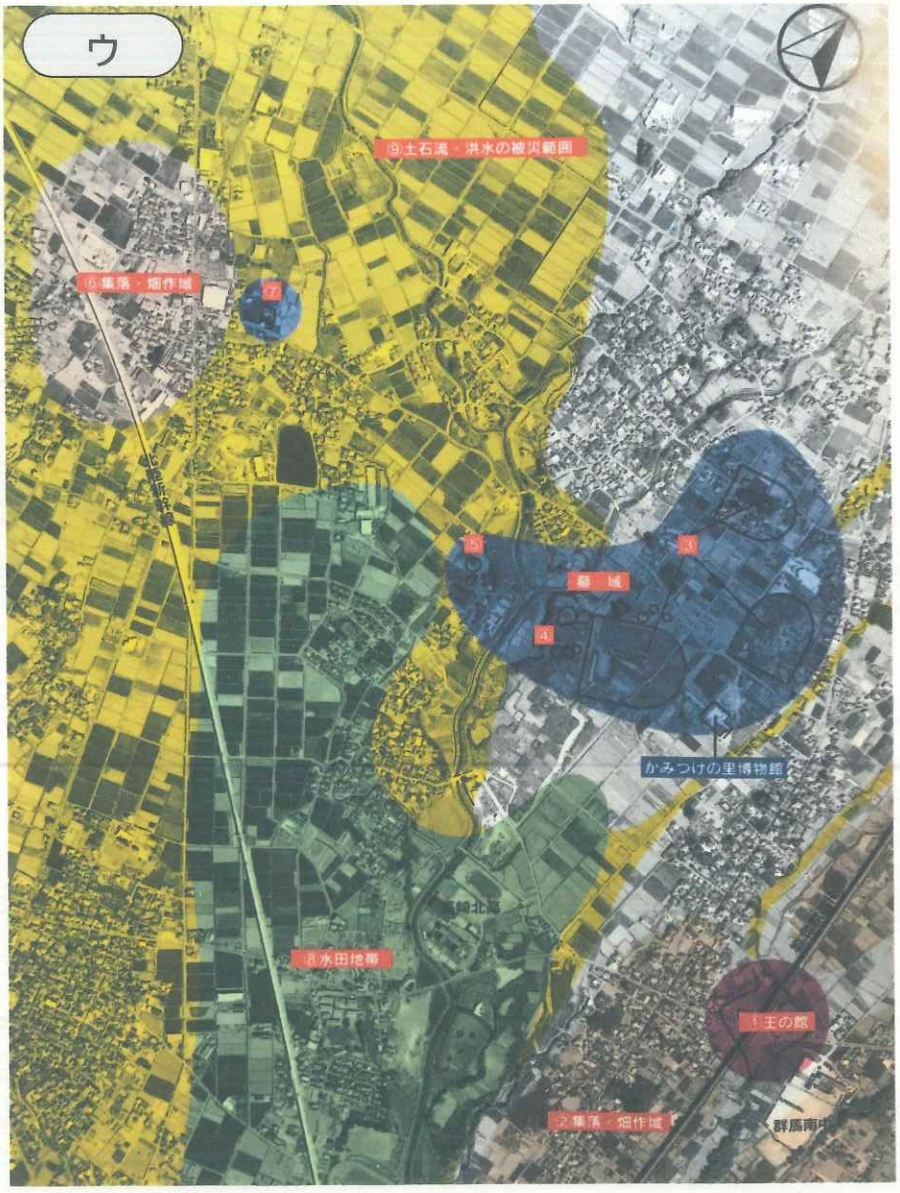
6　おわりに・・・まとめと感想・・・

まとめ

古墳時代の群馬の有力者は、『日本書紀』に“上毛野氏（上毛野君）”として登場します。天皇家を先祖とする一族で、朝鮮半島に遠征したり蝦夷（今の東北地方）の人々と戦ったりしたそうです。また、隣の武蔵国（埼玉から東京にかけての地域）でおきた事件に干渉するなど、大王を中心としたヤマト政権と深いつながりがあったようです。群馬の歴史だけでなく、日本や朝鮮半島の歴史も勉強する必要があるなと思いました。

三ツ寺Ⅰ遺跡や保渡田古墳群に眠っている豪族（王）はこの“上毛野氏”だったのでしょうか。有力な説の一つが、上毛野氏に関係する一族“車持氏”ではないかという説です。“グンマ”の由来とされる一族です。榛名山東南麓の井野川流域を拠点とした車持氏は、三ツ寺の居館を中心に、上毛野（かみつけの）（群馬県地域）を代表する勢力として活動したのです。では、北谷遺跡の豪族も車持氏なのかどうか、研究者の方々にも難しい問題のようです。三ツ寺の豪族は、居館で生活して、死後保渡田古墳群に埋葬されています。近くには田畑が広がり、人々が住む村があり、ちょっと離れたところには朝鮮半島からきた渡来人が　住む町もあったようです。（図版ウ）

三ツ寺の王の生活や社会の様子が何となくわかったように感じるのですが、北谷遺跡は全くわかりませんでした。北谷遺跡の豪族の古墳は前橋市の元総社の古墳ではないかという説もありますが、はっきりしていません。何だかとても難しい問題に思えてきました。



感想

北谷遺跡とはどんな遺跡なのか、そこで暮らしていた豪族はどんな人だったのか、古墳時代の群馬県（おもに旧群馬町）の様子が知りたいと思い、この自由研究を始めました。始めてみると、たくさんのことがわかったり疑問に思ったりの繰り返しでした。まだまだ調査しなくてはいけないことがたくさんあります。簡単に調べられると思っていたのですが、簡単に終りにできないテーマでした。

2つの遺跡を比較しようということで、三ツ寺Ⅰ遺跡から調べましたが、たくさんの研究が行われているのに、遺跡の様子を自分の目で見ることができません。私たちが生活している場所の地下には、たくさんの遺跡が眠っています。それを全部公園にするわけにもいかないのですが、できるだけ遺跡として保存してほしいと国や市に声を届けていきたいです。

北谷遺跡は中心の建物があった場所などはきちんと発掘されていませんが、その大きさや造りのしっかりしているところなどは、三ツ寺Ⅰ遺跡に負けない貴重な遺跡です。何と言っても、遺跡そのものを歩いて体感できるところがいいです。この遺跡の周辺の土地を高崎市が買い取って、将来は公園として整備する計画があるそうです。そのまま公園にしないで、ぜひもう一度発掘をしてほしいです。

歴史だけ勉強するのでは足りないとこもわかりました。地理の知識や理科の知識、土木や大工の知識なども必要です。当時の食べ物や着ていた服については、家庭科の知識が役立ちそうです。いろいろ勉強していこうと思いました。

ところで、中国の歴史にも、“水（河）を治めるものは、国を治める”という意味の言葉があるそうですが、水の利用（治水）は、昔から社会の大きな課題だったようです。三ツ寺Ⅰ遺跡で治水がうまくいくように水の祭りを行っていたことが気になったのは、このことばを聞いていたからです。SDGsにも安全な水の確保や陸の生態系の豊かさなど、水に関係する目標があります。古墳時代も現代も同じ課題に取り組んでいることになります。

最後に、いろいろ調べているときにとても大きなことに気づきました。それは、私の家から北谷遺跡が見えていたのです。それが表紙の写真です。歴史って面白いなあと感じました。

［参考とした資料］
・かみつけの里博物館常設展示解説書　『よみがえる5世紀の世界』（かみつけの里博物館）
・『第19回特別展　豪族居館　三ツ寺Ⅰ遺跡のすべて』（かみつけの里博物館）
・『ぐんま古墳探訪』　みて学ぶ　東国文化の輝き（群馬県文化財保護課）
・『高崎学Ⅱ』　高崎のなりたちとその正体
・『群馬の遺跡』4　古墳時代Ⅰ【古墳】（上毛新聞社）
・『遺跡から調べよう！』3　古墳時代（童心社）
・歴史写真館『日本史のアーカイブ』（とうほう）
・「榛名山古代遺跡タイムトラベル」（群馬歴史文化遺産発掘・活用・調査委員会）
・教科書や資料集（国府小学校・社会　　群馬中央中学校・歴史）

［助言・資料協力をいただいた方々］
・かみつけの里博物館
・群馬県埋蔵文化財調査事業団
・高崎市役所文化財保護課